
彼女のトモダチ

いとかなし

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

彼女のトモダチ

【Nコード】

N9212M

【作者名】

いとかなし

【あらすじ】

鈴木美波は15歳。高一にして初めて恋をした。でも相手は親友・千笑の彼氏で――。

1、初恋

私の名前は、鈴木美波。すずきみなみ 高校一年生。

「恋愛って楽しいよ」——誰かが言った言葉だけど、小中学校と陸上で汗を流してきた私にとって、出会いなんてなかったし、実際に恋愛なんか出来る環境じゃなかった。

そんな私が今日、十五歳にして初めて恋をした——。

* * * * *
* * * * *
* * * * *

「かっとなせ——田村！」

広い野球場内の声援が、たった一人に注がれる。手の平に握る汗が蒸発するくらい、熱い夏——。

ボールがバットの芯を捉え、気持ちが良いくらいの音が響き渡った。その瞬間、野球場内にいたすべての人間が一瞬、完全に呼吸を止める。

誰もが祈る試合の中で、一人の選手が満塁サヨナラホームランを叩き出した。

「すごい……」

応援席にいた美波が、ぼそっと呟く。

汗が滴り落ちる中で、美波の腕は鳥肌を見せていた。あまりの好プレーに、恐怖さえ感じているのだ。

「キャー！ 智樹！」

その時、美波の隣からそんな声が聞こえた。

この大観衆の中で一人、たった今ヒーローとなった選手の下の名を呼ぶ少女。

彼女の名前は、倉田千笑^{くらたちえみ}。美波とは小学校からの同級生であり、親友だ。そして今注目を浴びている高校球児・田村智樹^{たむらともき}の恋人でもある。

「やったよ、美波！ 熱い中で応援してた甲斐があったね。今日はついて来てくれてありがとう！」

興奮したままの千笑が言う。

美波は冷や汗に似た汗を手で拭いながら、千笑に笑いかけた。

「ううん、こっちこそ……すごい試合だったね。私、息が止まるかと思った」

「やだなあ、美波ったら。でも、私も惚れ直したわあ」

千笑の言葉に、美波は静かに微笑んだ。

「……うん」

「さて、じゃあ帰ろっか」

着々と帰ってゆく観客の中で、千笑が言った。

「え？ 田村と一緒に帰るんでしょう？」

驚いて美波が尋ねたが、千笑は笑って首を振る。

「ううん。部活の人と一緒に帰るから、私は会えないよ。今日は取材とかもあるだろうし」

「へえ……大変だね」

「まあね。一応、将来を嘱望されてる選手の一人だからね」

自慢するように言う千笑だが、その顔は少し寂しそうに見えた。

美波は家へ帰ると、机の前に座り、ふと目の前の写真立てに目をやった。中学の卒業式で撮った、千笑とのツーショット写真である。二人は小学五年生の時に同じクラスになって以来、クラスが別々になっても変わらず友達でいた。それは家も近いこともあるが、誰よりウマが合うからだろう。

そんな親友の千笑に彼氏が出来たのは、高校に入っすぐのことだった。二人は同じクラスで、千笑の彼氏である田村もまた同じク

ラスである。

田村は子供の頃から野球少年で、高校に入った今も変わらず野球に専念している。誰が見ても爽やかなスポーツマンに見えた。そんな田村に、千笑から告白をしたのだった。

中学時代から、千笑の興味は異性に対して強かったが、千笑は美波同様、取り立てて可愛いというわけでも、成績が良いわけでもない。美波は陸上部にかかりきりだった分、まだそれほど異性に興味があるわけではなかったが、少なくとも千笑はお洒落に目覚めていたし、高校に入ってから茶髪にし、一重瞼を簡易コスメで二重にし、今時の女子高生を気取っていた。

「彼氏、か……」

美波はぼそつとそう言った。気が付けば、高校生になってからは、周りに恋人が増えた気がする。部活一本の美波にも、そろそろ焦りもある。

そんな美波の脳裏で、今日大スターになった田村智樹の姿が蘇った。

「わ、駄目ダメ。なに考えてんの、私！ 田村は、千笑の彼氏なんだから……」

脳裏の田村をかき消した美波は、途端に空しくなった。親友が離れていく寂しさ、彼氏がない焦り、いろいろな不安が入り混じって、美波を襲う。思えば田村は、千笑と付き合う前から仲の良い男子の一人だったが、今では遠い存在になった気がする。

美波の脳裏に、すぐに田村の姿が蘇った。

「……仕方ないか。今日の田村、誰が見てもカッコ良かったもんね……」

美波は苦笑しながらも、心の中で何かが動き出そうとしているのを、無意識に止めようとしていた。

次の日の早朝。美波はランニングをしながら、学校へと向かっていった。朝練がある日の日課であり、軽く汗を流す。今日はいつも

より早くに目が覚めたので、美波はそのまま家を出て行ったのだ。
た。

途中、千笑の家に差しかかる。中学時代から部活もしていない千笑は、寝坊もしょっちゅうで、未だに遅刻魔だ。今も夢の中であろう千笑のことを思いながら、美波は学校へと走っていった。

カキーン——と、学校のグラウンドから、野球のノック音がした。その先には、千笑の彼氏である田村の姿がある。

「おお、鈴木じゃん。おはよう。早いな」

グラウンドの横を通った美波は、そんな田村に声をかけられた。

田村は千笑の彼氏としてはもちろん、同じクラスのため、話すことも多い。

早朝から一人で練習をしている田村を見て、美波は思わず感心してしまった。

「おはよう……そっちこそ」

「ん？ どうした？」

驚いた表情をしている美波に、田村が尋ねる。

「ううん……すごい努力してるんだね。昨日の試合も、頷ける」

「まあね。やっぱり人の倍以上練習しないと、上には上がれないと思うし。あ、昨日、千笑と一緒に見に来てくれてたんだって？ ありがとう」

爽やかにそう言った田村に、美波は微笑んだ。

「ううん。本当にすごかった。鳥肌立ったもん」

「あはは。言い過ぎ。それに、鈴木だって中学時代から陸上で賞も取っててすごいって、千笑が言ってたよ」

「私なんてすごくないよ。もう、千笑ってば……」

その時、グラウンドに数人の人影が出て来た。話していたおかげで、朝練の時間が迫っていたのだ。

「あ、ごめんね。練習の邪魔しちゃって」

「いや。それより、今度は俺が応援しに行くよ」

「……えっ？」

田村の言葉に、美波は驚いた。

「え？ って……もうすぐ陸上の大会なんだろう？ 昨日わざわざ来てもらったんだし」

「い、いいよ、そんなの。そっちだって、部活で忙しいのに……」

田村の言葉は嬉しかったが、野球部が忙しいことは知っている。

だが、謙遜している美波に構わず、田村の笑顔は変わらない。

「あはは。それはお互い様だろう？ それに鈴木は、千笑の友達なんな。大事にしますって」

笑ってそう言う田村に、美波も静かに微笑んだ。だが何故か、心がざわついているような、不思議な感覚が美波を襲う。

「ああ、うん……ありがと。じゃあね……」

無意識に引きつった笑顔で美波はそう言うと、そのまま部室へと向かっていった。

走って部室へ向かう間、美波の脳裏には田村の言葉がこだましていた。

『千笑の友達だもんな。千笑の……トモダチ——』

(……嫌だな。どうして悲しいんだろう。本当のことじゃない。それなのに、どうしてこんなに胸がバクバクいってるのか、わからないよ……)

美波は陸上部の部室に辿り着くと、ドアの前で息を切らせて深呼吸した。

(どうして……？ 私、おかしい。昨日の今日で、どうして今まで友達だった人を、途端に意識しているの？ しかも親友の彼氏だよ。おかしいよ、私……)

「おはよう、鈴木」

その時、美波はやって来た部活の先輩に声をかけられた。

「あ、おはようございます」

ハッと我に返って、美波は振り向いて挨拶をする。

「どうしたの？ 珍しいね。鈴木が息切らしてるなんて。もうすぐ大会なんだから、なまけてちゃ駄目よ」

「はい。大丈夫です……」

美波は頷きながら微笑んだ。

（大丈夫？ 私、ちゃんと笑えてる……？）

美波は波打つ心を抑えながら、部室へと入っていった。

「おはよう、美波」

その日、朝練を終えた美波が教室に入ると、すぐに千笑が声をかけてきた。いつもの光景だ。

寝坊の多い千笑は、未だに眠そうな顔をしており、朝練ですっかり血色の良い美波とは対照的である。

「おはよう、千笑……」

「ねえ、宿題見せて？」

「あはは。しょうがないなあ……」

朝の少ない時間、美波は呆れたように千笑にノートを差し出す。これもまた、いつもの光景だった。

「うわ、セーフ！」

その時、慌てた様子で教室に入ってきたのは、田村だ。ギリギリまで朝練をやっているのも、いつもチャイムギリギリの教室入りとなる。

「おはよう」

田村はそう言って、千笑の隣に座った。二人が付き合い始めたきっかけは、隣の席になったことが原因である。なにより田村は、誰にでも気さくに話しかけるので、入学間もなくして二人と仲良くなったことも事実だ。

もちろん、千笑の後ろの席である美波とも、田村はよく話すクラスメイトだ。

「おはよう、智樹。今日も朝練、お疲れさま」

千笑はそう言いながらも、宿題を写すことを止めない。

「宿題？ 鈴木、俺も写していい？」

「う、うん……」

すかさず参戦する田村に苦笑しながら、美波は二人の後姿を見つめていた。

思い起こせば、二人との楽しい思い出はたくさんある。美波と田村は、入学当時に席が隣同士だった。忘れた教科書を見せてあげたり、逆に借りたこともあった。練習でぐったりして眠っている田村の顔を見たこともある。そのすべてが輝き出したように、美波の中で田村への意識が、確実に変わっていった。

「終わった！　ありがとう、美波」

しばらくして、千笑が振り向いて言った。

「あ、うん……」

「あ、俺まだ。もうちょっと待って」

そんな田村を尻目に、千笑は完全に美波の方を向いて話し始めた。

「美波、もうすぐ大会でしょ。いつだっけ？」

「今日の日曜日」

「ええ！」

美波と千笑の会話に割って入るように、田村が振り向いて叫んだ。

「な、何？」

「なんだよ。俺、その日も試合じゃん！」

「そっか。でもその日は、美波優先だからね。時間がずればいいんだけど」

千笑が言う。

「うん。それはいいけど、俺も鈴木の応援行きたかったな……陸上の大会って行ったことないし、昨日のお礼にさ」

「まあ、仕方ないね……智樹は甲子園目指して、突き進まなきゃ」

「うん……ごめんな、鈴木」

そう言う田村は、本当にすまなそうにしていた。そんな田村に、美波は優しく首を振る。

「ううん。お互い、部活優先だよ。私だって、昨日はたまたま部活と時間がずれてたから行けただけのことだし……本当に気にしないで」

美波が言う。残念なような、ホッとしたような、なんとも不思議な気持ちだった。

2、目撃

それから一年後。私たちは高校二年生になった。千笑とはクラスが分かれたけれど、私と田村はまた同じクラス。でも、私たちの状況は何一つ変わらない。ただ一つ、私の心だけが、日増しに苦しくなっているだけだ。

どうして……？ 理由なんてない。私、田村が好きなんだ……。そんなことに気付いてる一年間。それでも押し殺すほかなかった、一年間――。

* * * * *
* * * * *

「美波。今日も部活だよね？」

ある日の放課後。部活へ向かう美波に、千笑が声をかけた。クラスが違って、親友である美波と、恋人である田村がいるため、千笑は何かといっは美波のクラスを訪ねて来る。

「うん。どうかしたの？」

「ううん。別に……」

そう言う千笑は、どこか元気がないように見えた。

「どうしたの？」

「ううん。たださ、なんかつまらなくて。智樹は残念だったけど、それでももちろん部活だし、美波はもうすぐ大会で忙しいし。私だけ手持ち無沙汰って感じで……」

千笑が言った。恋人の田村は先日、野球の試合に負け、早くも甲子園行きの切符を逃していたことで、最近少し落ち込んでいるようだ。それでも部活は続いているので、どこの部活にも所属していな

い千笑にとっては、恋人とも親友とも遊べない日々が繰り返されている。

「なに言ってるの。千笑は部活やってないんだから、しょうがないじゃない。それに、他に友達がいらないわけじゃないんだし」

「だけど、他の子と美波は違うよ。親友じゃない」

千笑の言葉に、美波は嬉しさと同時に顔を赤らめた。そんな美波を見て、千笑も赤らむ。

「やだなあ、美波ってば。どうしてそこで赤くなんのよ。こっちまで恥ずかしくなるじゃん」

「千笑こそ……っていうか、こんなところで告白はやめてよ」

「あはは。ごめん」

「嘘ウソ。嬉しかった。でも、ごめん。もうすぐ大会あるから、私も頑張らないと。それが終わったら、毎日遊ぼ！」

「うん。困らせる気はなかったんだ。許して……大会まであと少し。それが終わったら夏休みだもんね。頑張ってるね！」

「うん、ありがとう。じゃあね」

なおも少し寂しそうな千笑に、美波は心の中で悪く思うも、今は陸上部の大会も近いのため、部活を優先させるほかなかった。

美波は千笑に手を振ると、教室を後にした。

グラウンドの一角では、陸上部の部員たちが準備運動をしている。

「じゃあ、行くよ」

「はい！」

「ヨイ、スタート！」

部長のかけ声で、部員たちが走り出す。ウォーミングアップ兼ねてのランニングだ。その中に、美波もいた。

美波は短距離ランナーで、中学時代にはいくつか賞も獲っている。もうすぐ開かれる陸上の大会にも、出場が決まっていた。美波は自分のペースを保ちながら、学校を出て行った。

ふと、ボールが当たる気持ちの良い音が聞こえた。野球部である。

美波の脳裏に、田村の顔が浮かぶ。だが美波は、それを打ち消すように顔を振ると、そのまま走り続けた。

ランニングコースは、学校周辺を数周する。これは、陸上部の日常である。

駅の近くに差しかけた時、美波の足がふと止まった。他の部員もマイペースで走っているのに、美波の側には誰もいない。

「千笑……？」

美波はぼそっと呟いた。視線の先には、千笑がいた。千笑は道の反対側を歩いており、美波にはまったく気が付かない。そして千笑の側には、見知らぬ男性の姿があった。相手は私服なので、大学生かフリーターだろうか。親しげな様子で、そのまま駅前のカラオケボックスへと入っていった。

「鈴木。どうしたの？」

状況が飲み込めず、呆然と立ち尽くしている美波に、後から追って来た部活の先輩が話しかける。

「あ、いえ……なんでもないです。すみません」

「大会近いんだから、ぼやぼやしてちゃ駄目だよ。行こう」

「はい……」

美波はそのまま、もう一度走り出した。

（千笑……浮気じゃないよね。ううん。私の見間違いかもしれない。あれは、千笑じゃない……）

美波は心の中で、そうケリをつけた。だが、同じコースを数周するため、駅前を通りかかる度に、千笑の姿を探していた。

放課後。部活の仲間と別れ、美波は帰り道にあるコンビニエンスストアへと足を運んだ。疲れていても、今日は真っ直ぐ帰る気にはなれなかった。

雑誌コーナーで、パラパラとページをめくりながら、美波は千笑のことを思い出していた。

「鈴木」

その時、横から声をかけられた。そこには、部活帰りと思われる、田村の姿がある。

「偶然だな」

「田村……」

田村は美波を横切って、少年誌を手にとった。

「毎日、毎日、暑いよな」

ページをめくりながら、ぼそつと言う田村に、美波も自然と笑みが零れる。

「本当だね。田村、真っ黒」

「おまえこそ」

二人は笑った。田村は見えていたページを閉じると、少年誌を抱えたまま背を向け、その場から去っていった。

美波は居なくなった田村に残念な気持ちになりながらも、見ていた雑誌を眺め続けていた。

するとそこに、買ったばかりの袋を下げて、田村が戻ってきた。

その手には、二つ入りのチューブアイスが下げられている。

「アイス食わない？」

「え？」

「もう暗いし、家の方向一緒だろ？ 途中まで一緒に帰ろ」

自然なまでの田村の優しさに、美波は頷き、そのまま二人は店を後にした。

一つとなっているチューブアイスを二つに割ると、田村は一つを美波に渡し、歩き始めた。

「マジであつ……」

汗を拭いながら、田村は美波の一步前を歩いている。美波はそんな田村の後姿を見つめ、アイスを口にする。

「……何かあった？」

そんな時、田村がそう言って振り向いた。

「え？」

「いや……さっき、怖い顔してたから……」

「……してた？ いつ？」

「コンビニで。だからちよっと、気になって……」

美波は言葉を失った。もしかしたら田村は、心配して声をかけてきてくれたのではないか。だがそんな優しさに応えることは出来ない。悩みの原因は、田村の恋人である千笑のことなのだ。もしかしたら千笑が浮気しているかもしれないことなど、田村に相談出来るはずがない。

「あはは……ありがと。でも、大丈夫だよ」

「……そう？」

「うん。ただ、もうすぐ大会が近いから……ちよっとナーバスになったりしてるんだ」

美波の言葉に、田村は理解した様子で、微笑んで頷いた。

「そっか。そういうの、よくわかる。大会いつ？」

「来週の日曜日」

「じゃあ、俺も応援しに行っている？」

「え？」

その言葉に、美波は驚いた。

「来週の日曜は、試合ないから。部活はあるけど、なんとか行くよ。去年、行けなかったし」

「いいよ、そんなの」

「いいじゃん。千笑と行くよ」

美波は自然に微笑んだ。田村の口から千笑の名を聞くだけで、少し傷つく自分がある。だがこの一年で、感情を押し殺して笑うのは慣れてしまった。

「うん。ありがと……」

夕暮れの街を、二人は静かに帰っていった。

夜。美波は宿題を終えると、ベッドに寝そべった。どうしても離れない、田村の顔。そして千笑の姿。千笑の様子が気になって仕方

がないが、美波はそのまま目を閉じ、今後どうしたらいいのかを考えた。

「もう嫌だ。ヤバイよ、ホント……どうして？　頭から離れない……」

脳裏に浮かぶ田村の顔を振り切るために、美波は集中して他のことを考えようとした。しかし、他に思い出すことといえば、千笑のこと。見知らぬ男性とは、どう見ても恋人同士のように見えた。男女のことに疎い美波には、恋愛や浮気など、すでに脳内のキャパシティを超えている。

その時、部屋のドアがノックされた。と、同時に、声が聞こえる。「美波。お母さんから、洗濯物」

三歳年上の姉の声である。

美波がドアを開けると、両手一杯に洗濯物を抱えた姉が立っていた。

「ごめん、お姉ちゃん」

「いいよ。じゃあね」

「あ、お姉ちゃん。ちょっと……相談があるんだけど……」

首を傾げた姉を部屋に引き込むと、美波は思い切って口を開いた。「なによ。どうしたの？」

「あのね……今日、彼氏がいる友達が、彼氏じゃない男の人と歩いてるの見かけちゃったの。これって、浮気かな……」

ためらいながらも言った美波に、姉は天井を見上げて考えた。

「その友達って、もしかして千笑ちゃん？」

「ち、違うよ！」

「へえ。あんたも千笑ちゃんのほかに、友達いるんだ」

「うるさいなあ。もういいよ」

からかい半分の姉に嫌気が差して、美波は口を尖がらせ、ふてくされた。

「ごめん、ごめん。まあ、一概に浮気とは言えないんじゃない？　私だって男友達と二人で会うこともあるし。しばらく様子を見てた

らしいじゃない。その彼氏とは、端から見てうまくいってるんですよ？」

「……うん。たぶん」

「じゃあ、いいじゃない。あんたが口出すことじゃない」

その言葉に、美波は押し黙った。確かに自分がしゃしゃり出では、余計に混乱させるのではないかと思う。

「うん……」

「まあ、そんなに気になるなら、直接聞いてみたらいいじゃない。友達なんでしょ？ 案外、単純なことかもよ。そんなことより、あんたの恋愛はどうなのよ」

「その話、今関係ない」

「あるある。あんたももう年頃でしょ。彼氏の一人や二人作らないと、お母さんも心配するよ。お父さんは反対するかもしれないけど」
苦笑して、姉が言う。

「お姉ちゃんに言ったのが間違いだった……」

「なによ、それ」

「ううん……おかげで少し楽になった。ありがとう、お姉ちゃん」

「いいよ。じゃあ、おやすみ。早く寝なさいよ。大会近いんでしょ」
「うん。ありがとう……」

姉はそう言うと、美波の部屋を出て行った。美波はベッドに寝そべると、目を閉じた。姉の話は参考になったのかはわからない。だが、しばらく様子を見ようと思った。

「そうだよ。あの二人はうまくいってるじゃない。田村のことも、意識しないって決めたじゃない。一年間やってこれたんだもん。大丈夫……田村は野球部エース。カッコ良く映ってるだけ……きっとみんなだって、そうだよね……？」

自問自答するように、美波は何度も頭の中でそう言い聞かせた。

3、告白

次の日。朝のチャイムが鳴る中で、猛ダッシュで田村が教室に入ってきた。

「やっべー。セーフ……」

田村は汗を拭うこともなく、美波の隣の席へと着いた。未だ名前順の席のため、二人は隣同士の席である。

「おはよう」

「おはよう。すごい汗だね」

声をかけてきた田村に、美波が答える。

「部活帰りだからな。汗臭かったらごめん」

「それはこっちもだよ……」

「あはは。こっちがこんなのに気にしてらんないよ。それに女子は大丈夫でしょ。まあ、お互い部活に燃えてるもんな」

ニカツと笑って、田村が言う。毎朝繰り返される光景だが、田村の笑顔はカッコ良いというより、可愛い笑顔だった。日焼けした顔に、白い歯が余計に輝いて見える。

「まあね……」

少し緊張して、美波が答えた。

「あ、いたいた。田村！」

その時、別のクラスの生徒が、田村に声をかけた。田村と中学校が一緒らしく、よく訪ねてくる生徒だ。

「何？」

「英語の教科書貸して」

「またかよ。いいけど」

田村はぎっしり詰まった机の中から教科書を出すと、出入口へと歩いていった。田村の机の中は、いつもぎっしりである。

「ホームルーム始めるぞ」

その時、担任が教室に入ってきたので、田村は慌てて席へと戻っ

ていく。

そんな田村に、美波は思わず笑った。

「え、なんかおかしい？」

きよとんとして田村が尋ねる。

「うん。だってなんだか、貸本屋さんみたい」

クスクスと笑っている美波に、田村は少し照れたように顔を掻いた。

「いや、俺だって、教科書持って帰らないわけじゃないよ？ たまたまね……」

「ああ、たまたまね……」

二人はクスリと笑った。

（そう、今日も大丈夫……こうして笑っていれば、なにかもきつと忘れられる……何も考えなくていい。今は部活に打ち込まなきゃ……）

美波は目を閉じると、授業へ耳を傾けた。

夕方の学校に、下校時間を知らせる音楽が響いた。各部活が、一斉に片付けを始める。

美波のいる女子陸上部も同じだった。片付けを終えると、先輩後輩入り混じって、同じ方向同士で帰る。最後まで一緒に帰り道なのは、同じ短距離ランナーでもある、一人の先輩だった。その先輩は、面倒見が良く、後輩の間でも人気である。

「鈴木。どうかした？」

二人きりになった時、美波に向かって先輩がそう尋ねた。

「え？」

「昨日から、ちょっと元気がないみたいじゃない。部活のこと？ それとも他のこと？」

「あ……すみません。部活のことではないんですけど……身が入ってませんでしたか？」

「そういうわけじゃないけど……でも、心配事があるなら大会にひ

びくし、浮かない顔してるから」

心配そうに自分を見つめる先輩の顔が、美波の目に映る。

「ごめんなさい。でも、大丈夫です。今に始まったことじゃないし……すみません。気合入れ直して頑張ります」

「そう。頑張ろうね」

「ハイ」

二人はしばらく沈黙のまま、帰路を歩いていった。

「あ」

その時、先輩が前を向いて言った。美波は先輩を見つめる。

「え？」

「いや、ほら、あそこに彼氏いるよ」

先輩が指差した先には、昨日と同じコンビニの前で、座りながらジュースを飲んでいる、田村の姿があった。同じ部活の仲間か、他にも数人の男子生徒が店から出て来て、田村の隣に座った。

「えっ」

「彼氏でしょ？」

「ち、違いますよ！」

先輩の言葉に、慌てて美波が叫ぶ。

「そうなの？ てっきり鈴木の彼氏かと思った。よく話してるよね？ 鈴木のカラス通る時も、いつも話してる印象がある」

確かに田村とは、グラウンドでも何処でも、会えば二言三言は交わす仲だが、先輩にそう思われていたことなど、夢にも思ってもいなかった。

「違います。あれは私の親友の……彼氏で、同じクラスだし、席も隣だから……です」

しどろもどろになりながら、美波が言った。事実でも、好きな人が親友の彼氏だと自分の口から言ったことで、美波はそれを思い知らされていた。

「そう？ ごめん、勘違いか。じゃあ私、こっちだから。また明日ね」

先輩はそう言うのと、別の道へと入っていった。

美波は赤くなりながらも、コンビニの前を通りかかった。田村以外は知らない人なので、そのまま通り過ぎる。

「鈴木！」

その時、田村の声が聞こえた。振り向くと、いつもの笑顔で田村が笑っている。

「なにシカトしてんだよ」

「し、してないよ」

「あはは、冗談だよ。ヤローばっかでガウ悪いもんな。お疲れ。気を付けて帰れよな」

「あんたもね！」

美波はそう言うのと、家路を急いだ。なんだか嬉しくてたまらない。偶然にも田村と出会えたこと、田村から話しかけてくれたことが、美波の顔を綻ばせる。

美波がそのまま家へ帰ろうとすると、前から一人の少女が走って来た。千笑だった。

「千笑？」

「あ、美波……」

息を切らせながら、千笑は美波の前で立ち止まり、呼吸を整える。

「どうしたの？ あ、今、コンビニに……」

そう言いかけたところで、美波は言葉を濁した。しかし、すぐに千笑が口を開く。

「うん。智樹に呼び出されて……じゃあ、またね！」

千笑はそう言うのと、美波を横切って走っていった。

突然、現実に戻されたように、美波は絶望感を味わっていた。（そう……何があっても、田村は千笑の彼氏。千笑は私の親友……）

美波はそのまま家路を歩いていった。その間、千笑と出会った頃が思い出される。

千笑は小学五年生の時に初めて出会った子だった。人見知りだった美波に、気さくに話しかけてくれた子である。後で聞けば、千笑

も人見知りだったようだが、それでも声をかけてくれたことが嬉しかった。

それからというもの、二人は何処へ行くにも一緒になった。家も近いため、互いの家で遊ぶことはもちろん、何度も泊まりに出かけた。

「ずっと一緒にいようね」

いつか交わした約束は今でも固く結ばれ、いつでもどこでも一緒である。二人は間違いなく、親友同士だ。

（この友情だけは、絶対に壊したくない……）

美波は改めてそう決意すると、家へと帰っていった。

数日後の放課後。部活を終えた美波は、外にある水道で手を洗っていた。しばらくすると、後ろに気配を感じた。振り向くと、一人の小柄な少年が立っている。

「あの……」

「……ハイ？」

美波は怪訝な顔で少年を見つめた。面識はあった。野球部員の一年生で、田村と家も近いのだろう、よく一緒にいるところを見かける。だが、名前も知らない。

少年は、近くに人がいないことを確認すると、手を差し出してお辞儀をした。

「僕、野球部の阪井っていいます！ 好きです。付き合ってください！」

あまりに突然の出来事に、美波は驚いてしまった。思えば告白など、人生で一度もされたことがない。

「えっ……えっ？」

美波が驚いていても、阪井という少年は顔を上げようとしないう手を差し出したまま、微動だにせず返事を待っている。

そんな真剣な様子を見て、美波は嬉しさを感じつつも、それを受け取る気にはなれなかった。

「ごめん、なさい……」

言いにくそうに美波がそう言うと、阪井はやっと顔を上げた。そして諦めた様子で、残念そうに阪井が口を開く。

「やっぱり……駄目ですか……」

「駄目っていうか、その……私、阪井君のこと、何も知らないし……」

美波の言葉に、阪井は頷く。

「はい……最初からわかってました……でも、僕はずっと見てたんです」

「……」

「残念ですけど、まだ早かったみたいで……すみません。今度の大会、頑張ってください。ありがとうございました！」

阪井はそう言うと、そのまま走って去っていった。嬉しいような残念なような、不思議な感覚が美波を包む。

「やっぱり駄目だったか……」

その時、そんな声が聞こえ、美波は驚いて振り向いた。するとそこには、田村がいる。

「田村！」

「だから時期が早いって言ってんのに、聞かないんだからな、あいっ……」

「聞いてたの？ 知ってたの？」

ムツとするように、美波が田村に詰め寄る。一体、いつからそこにいたというのか。

「最初からいたよ。あいつが告るの知ってたから……あいつ、ずっとおまえのこと気にかけてさ。何度も相談されてたけど、考えてみれば俺も鈴木のこと何も知らなかったから、アドバイスなんて出来なかったけど」

苦笑して言う田村に、美波は悲しくなった。だが、そんな美波をよそに、田村は話を続ける。

「駄目かな？ あいつ、いい奴だよ。将来エースになると思うし、

優しいしさ。まずはこれから、友達としても付き合ってやってくれれば……」

その時、田村は美波の様子がおかしいことに気が付いた。俯いている美波の顔は、陰になって見えないが、肩を小刻みに震わせている。

「……鈴木？」

田村はそこで初めて、美波が泣いていることに気付く。

「す、鈴木。ごめん、俺……」

田村がそう言いかけたところで、美波は走り去っていった。

悲しかった。悔しかった。美波はそのまま、学校を飛び出していた。

4、ガラスの心

家に帰った美波は、部屋で一人、泣き続けた。田村の行動が、なぜこんなにも悲しいのか。

一年間押し殺してきた思いが爆発するかのように、涙は止まることを知らない。だが思い出すことは、今まで接してきた田村との他愛もない楽しい思い出や、可愛らしい笑顔ばかり。こんなにも好きだという気持ちや、親友の恋人ということで諦めてきた恋は、気持ちだけ膨れ上がったまま、もはや美波を支えきれなくなっていた。誰にも伝えられない想いに、美波はその日一晚、ただただ泣いていた。

次の日は土曜日で休みだったが、部活を休むわけにはいかない。明日の日曜は、待ちに待った大会なのだ。美波は腫れた目を何度も洗うと、気を取り直して学校へと走っていった。

学校に着くと、すぐにグラウンドへ向かう。大会を明日に控えているので、顧問の先生も部員たちも、みんないつもより少し気が立っているようだ。そんな部員たちを尻目に、美波だけは生気のない目でその場に居た。誰の言葉も耳に入らないように、美波の心は何処にもない。

「鈴木！」

最後の練習に身の入らない美波に、先輩の櫓が飛ぶ。

「どうしたのよ、鈴木。朝から上の空じゃない」

「……すみません」

先輩の言葉に、美波は無意識に答えた。

「なにかあったの？」

「……いいえ……」

「……悩み事があるなら聞くよ？ 言えないならそれでもいい。だけど、明日は大会なんだから。それが終わってから悩めばいいじゃ

ない。そんな顔してるんなら、出場取り消されても文句は言えないわよ」

先輩がそう言った。美波はなおも元気は出ないものの、その言葉を理解して頷く。

「すみません。練習に戻ります」

美波はそう言うのと、気を取り直して練習へと戻っていった。

何がこんなに心を沈ませているのか、美波自身も戸惑っていた。ただ予想以上に自分が田村を好きだということに、美波は気付かざるを得なかった。

その日、練習を終えた美波は、誰の誘いも断って、一人で家路を急いでいた。

「鈴木！」

学校を出かかった時、そんな声に美波は振り向いた。すると、野球場で片付けをしている野球部員が目止まる。その中に、こちらへ向かって手を振る田村の姿があった。田村はいつもと変わらぬ笑顔で、手を振っている。

「鈴木！ 明日見に行くからな！ 頑張れよ！」

ずいぶん遠くからだが、そう叫ぶ田村の声は、美波にまでハッキリと届いた。

「……馬鹿……！」

美波はそう呟くと、田村に何も言わず、その場から走り去っていった。途端、どんどん涙が溢れてくる。

（ひどいよ、田村……昨日私が泣いたことも、なかったことにしてる……好きだけど……私があんたを好きなこと、このまま黙っているつもり。千笑のこと、絶対に失いたくないから……だけど……どうして昨日、あんたの言葉で泣いたと思ってるの？ こんなに我慢してる私、ちょっとくらい気付いてよ……！）

美波はそのまま、家へと走っていった。

次の日の朝は最悪だった。今日も腫れぼったい目は、涙に濡れて充血し、心も平常心どころではない。昨日もあれから、考えれば考えるほど、涙が止まらなかった。

だが、今日は待ちに待った陸上大会だ。今となっては乗り気ではないものの、美波は気持ちを切り替えるように、何度も何度も顔を洗った。鏡に映る洗い立ての顔は、全体が腫れぼったく、見つめれば涙が溢れ出しそうだった。

「なにやってんの、私……付き合ってもいないのに、傷付いてる場合じゃない。今日は大会のことだけ考えなくちゃ……」

前向きに考えようとすれば、なんとなく気持ちも晴れてくる。いつまた引き込まれるかもしれない闇に、深くは考えようとせず、美波は家を飛び出していった。

しかし、気持ちを切り替えようとする美波とは逆に、曇り空は今にも泣き出しそうだった。

美波は駅に着くと、すでに来ていた先輩と合流した。同じ駅の部員と、大会のある競技場まで行くことになっている。

「おはよう、鈴木」

「おはようございます」

「どう？ 調子は」

「あ、はい……昨日はすみませんでした」

心配そうに見つめる先輩に、美波は申し訳なく謝った。

「いいよ。少しは立ち直ったなら。今日は走ることだけ考えな」

「はい……」

「さて、あと一人はまだかな。遅刻魔だから心配」

先輩は、携帯を取り出しながらそう言った。同じ駅の部員はあと一人いる。まだ集合時間にはなっていないが、先輩はその一人に電話をかけ始めている。

その間、美波は遠くを見つめた。すると、美波の目はまたしても一人の人物に釘付けになる。

通りの向こうを歩いているのは、数日前に目撃した時と同じ光景だった。そこには、千笑と見知らぬ男性が、仲良く腕を組んで歩いている。

「ち……」

「お待たせ！」

その時、あと一人の部員が合流してきたので、美波は現実へと引き戻された。

「揃ったね。行こう、鈴木」

「は、はい……」

美波がもう一度振り向くと、さっきいたはずの場所に、千笑の姿はなかった。

電車の中で、美波は笑顔を取り繕いながら、千笑のことを思い出していた。地元の周辺で、恋人以外の男性と腕を組んで歩くなど、美波には到底出来ることではない。田村とも同じ地元で、会ってしまっ確立も高い。なにより朝のこの時間では、いつも寝坊ばかりの千笑にとって、まるで朝帰りでもしたかのようなのである。

美波の中で、千笑のことを信じようとしても、悪いことばかりが渦巻いているようだった。

「鈴木。もうすぐだね。大丈夫？」

競技場で順番を待つ美波に、先輩が話しかけてきた。優しい先輩の顔を見るだけで、心が落ち着くような気がする。

「あ、はい……大丈夫です」

「そう。なんだか雨が降りそうな天気だね。寒くなってきたし、身体冷やさないようにね」

「はい」

そう返事をして、美波は何度も足を振ったり手を伸ばしたりし、間近に迫る順番を待った。

美波は短距離走に出ることになっている。だが、ただその時を待

つこの時間だけは、何度経験しても慣れない緊張感がある。

「美波——！」

緊張している美波に、遠くでそんな声が聞こえた。顔を上げると、客席に大きく手を振る人影があった。さっき見た顔とはまったく違い、いつもと同じ、元気一杯の千笑の姿だった。

「千笑……」

「頑張って——！」

そう叫び続ける千笑に、美波は笑う。だがその笑顔の中にも、いくつもの疑惑が消えることはない。

「鈴木。もうすぐだよ」

先輩に呼ばれ、美波は千笑に手を振ると、そのまま待機場所へと向かった。ふと、もう一度客席を見ると、千笑の隣にはいつの間にか田村の姿もある。美波の心が、張り裂けそうに鼓動する。

（苦しい……）

「次、位置について」

その時、やっと美波が呼ばれ、スタートラインに着いた。スタートラインからは、遠いながらも真正面に、千笑と田村の姿を捉えることが出来る。

突然、競技用のピストル音が、けたたましく鳴り響いた。

一瞬、二人のことを考えていた美波も、ハッとして反射的に走り出す。まるで二人に向かって走っているかのように、美波は遠くから自分を見る二人を見つめた。そんな二人の手が、固く繋がれているのが遠目にわかった。

（もう、駄目……くじけそう……）

美波は意識を失うように、競技中に崩れて転んでしまった。もう、走れなかった。

「鈴木！」

遠くで先輩の声が聞こえたが、美波はもう立ち上がる気力もないかのように、その場で泣き崩れた。

（もうイヤ……どうして私、こんなに馬鹿なんだろう……割り切れ

ない。無理なものは、無理だ……!」

救護テントの仮設ベッドで、美波は横になっていた。先輩や先生が付き添ってくれているものの、その声は美波には届かない。

（私は、千笑が大事。千笑のことも信じてる……そう、だから……何があっても、田村のことを好きになっちゃいけないんだ。一人で辛くなるのも駄目。誰にも心配かけちゃ駄目。こんな駄目な私なんか、死んじやえばいいんだ……!）

止まることを知らない美波の涙を見て、先生も先輩も、それ以上、美波に何も言おうとはしなかった。

しばらくして、外は雨がぱらつき始めた。すべての競技を終え、すでに競技場は片付けの準備に入っている。

美波もだいぶ落ち着いたようで、帰り支度を始める。付き添いの先生と先輩を残して、他の部員は帰っていったようだ。美波も支度を整えると、先生と先輩とともに、競技場を出ていった。

診察した医師からは、極度のストレスと疲労、そして寝不足だと診断された。ネガティブな自分と、大会で走りきれなかった自分に嫌気が差し、美波は深く落ち込んだ。

「美波……!」

競技場を出てすぐに、外にいた千笑が駆け寄ってきた。そこに田村の姿はない。美波の顔は強ばるものの、雨の中、心配そうな顔で待っていてくれた親友の姿には、素直に嬉しかった。

「美波。大丈夫?」

「千笑……うん……田村は?」

「先に帰ってもらった……一緒に帰ろう」

千笑はそう言って、自ら差している傘を差し出す。美波はその傘に入ると、先生と先輩にお辞儀をして、千笑と歩き出した。

「残念……だったね」

「……うん……」

重い雰囲気の中、二人はそれ以上しゃべらず、駅へと歩いていった。電車の中でもしゃべろうとしない千笑に、美波は違和感を覚える。

「美波……智樹のこと、好きなの？」

その時、美波の気持ちを察するように口を開いた千笑は、唐突にそう尋ねてきた。

「……えっ？」

「好きなんでしょ？ 智樹のこと」

「……」

美波は、言葉を失った。自らの恋人を好きかと尋ねる千笑に、何と答えれば良いのかわからない。

沈黙のまま、電車は二人の住む最寄り駅へと止まった。二人はそのまま、無言で電車を降りていく。

「……どうして黙ってたの？ 隠し事はやめようねって、今まで散々言ってきたじゃない。どうして黙ってるの？」

改札から出たところで、千笑は今にも泣きそうにして、美波にそう訴えた。美波は責められているようで、拳を握り締める。

「そんなの……言えるわけじゃないじゃない！」

拳を握り締めたまま、美波が言った。

「美波……」

「そりゃあ、今までだって散々悩んできたよ！ 何度言おうかと思ったことか……だけど、言えるわけじゃないじゃない。千笑の恋人、好きになっちゃったなんて……！」

美波の言葉に、千笑の表情も変わる。

「言えればいいじゃない！ そりゃあ、彼氏を譲るなんて言えないよ。でも、親友がここまで溜め込んでるの見て、それでも気付かないフリしてろって言うの？ どうしてそんなになるまで、一人で我慢してるのよ！」

駅前だが周囲も気にせず、二人はぶつかり合っていた。

少し本音を吐き出したことで、美波は止まらなくなったように、もう一度口を開いた。

「じゃあ……何？ 千笑はなんなの？」

「え？」

美波の問いかけに、千笑は首を傾げる。

「私、見たよ。今日も千笑が、知らない男の人と一緒にいるの……あれは何？」

「……それは……」

「今日だけじゃない。この間だって見たんだよ。だけど、千笑は何も言ってくれなかった……いつもだったら、昨日あったこととか、なんだって話してくれてた。でも、どうして黙ってるの？ あれはなんなの？ 田村がいるのに、どうしてあんな人と腕組んで歩いてるの？ ねえ、どうして何も言わないの。どうして黙ってるのよ！」

今までの不満が爆発するように、涙とともに美波はそう叫んでいた。

千笑は何も言えなくなったようで、小刻みに肩を震わせている。

「……もう、いい……」

やがて、千笑がそう言った。

「部活、部活で、全然話す暇がなかったの誰よ！ 美波も智樹も、全然わかってない。忙しいのはわかってる……だけど、別のクラスで話す暇もなかったじゃない……もう、美波なんか知らない！」

千笑はそう言い放つと、そのまま走り去っていった。

残された美波は、雨に打たれたまま、しばらくその場に立ち尽くしていた。

5、孤独

次の日。

「風邪ね。母さん仕事行くけど、後で一人で病院行くのよ」
ベッドで寝ている美波に、母親が体温計を見ながら言った。

「いいよ。薬飲んでれば治るから……」

美波が言う。昨日、雨に濡れて帰ってきたからか、昨日から熱が出ている。

「まったく……まあ、大会もあって疲れも出たんでしょ。今日はゆっくり休んでなさい。おかゆ作っておいたから、後で食べるのよ」

「はい……」

そう言い残すと、母親は仕事へと出かけていった。

家に一人残された美波は、親友の千笑と喧嘩したショック、そして許されない恋の相手である田村のことで、気持ちが晴れることはなかった。

その日一日、美波はいろいろなことを考えていた。

次の日。熱の下がった美波は、行きたくないと思いつつ、学校へと出向いた。喧嘩してしまった千笑とは、クラスが違うために朝一番で会うことはなかったが、隣の席は田村であるため、気まずさは変わらない。

「おはよう、美波ちゃん。具合は大丈夫？」

後ろの席の女子が、美波に話しかけてきた。

「あ、おはよう。うん、大丈夫……」

「風邪だってね。田村も昨日、風邪で休んだから、二人揃ってサボリじゃないかって噂飛んでたんだよ」

「えっ？」

美波は二つの意味で驚いた。田村も昨日は学校を休んでいたこと、そして同じ日に休んだというだけで、二人でサボリだと噂が立った

ということだ。

「田村も風邪？　でも、どうして二人でサボリだなんて……」

「だって、二人仲が良いじゃない。ぶっちゃけ、付き合ってるんじゃないの？」

「ま、まさか！」

その時、田村が教室に入ってきた。

「田村、おはよう」

美波と話していた同級生が、挨拶をする。

「うん、おはよう……」

田村は美波を見て軽く会釈すると、すぐに席に着いた。いつもの田村なら、ちょっとしたいを出すように気軽に明るく話しかけてくれるはずであるが、なんだか妙によそよそしい感じに見える。

「田村、風邪だった？　美波ちゃんも、風邪で昨日休んだよね。うちのクラス、二人が揃ってサボってるんじゃないかって、昨日はその話題で持ちきりだったんだよ」

「……何も知らないのに、そういうからかい半分、やめてくれよな。鈴木にだって迷惑かかるし、俺たち、べつに付き合ってるわけじゃないから。俺、彼女いるし」

いつになく拒否する態度で、田村がそう言った。静かな言葉だったが、クラスメイトの誰もが見たこともない、田村の怒った顔である。

「あ、うん。ごめん……」

同級生はそう言うと、すぐに別の人と話し始めた。

美波も席に着き、いつもと違う様子の田村の横顔を見つめた。そんな美波の視線に気付いて、田村が美波を見つめる。

「……何？」

「あ、ううん……昨日、休んだんだって？」

「ああ、うん……」

生返事で答える田村は、やはりいつもとは違うようだ。

「私も風邪引いて休んだんだ……ホント、偶然二人で同じ日に休

んだからって、噂立つなんて困っちゃうね……」

苦笑しながらそう言う美波に、田村は少し俯いた。

「……ごめん。悪いけど、もう必要以上にしゃべるのやめない？」

突然、田村がそう言った。美波は一瞬、何を言われているのかわからなかった。

「えっ……？」

「……千笑の友達だからって、しゃべり過ぎてたみたいだから。千笑に誤解されても困るし」

田村の言葉は、何の温度もなく、美波の心を冷たく吹き抜けていった。自分から告白することなくふられたように、田村を好きでいることすらも拒否されたように思える。

「あ、はは……うん。そうだよね……」

「ああ、昨日の試合、残念だったな……でも、また頑張れよ」

そう言って、田村は顔を背けた。美波には、もう田村の横顔しか映らない。

またその日、突然の席替えが行われた。廊下近くの一前席の席を引き当てた美波とは正反対に、田村は窓際の席であった。

沈みかけた心に追い討ちをかけられたように、美波の心はどん底まで沈んでいくようだった。

その日から、美波と田村がしゃべることとはなくなっていた。お互いがお互いを避けるように、目を合わすことすらない。

また、美波と千笑も、和解などまったく出来る気配ではなかった。たまにすれ違う廊下でも、挨拶一つ交わすこともなかった。

6、三年生

私たちは傷つけ合いながらも、その歩みを止める術もなく、一歩ずつ大人に近付いてゆく。

だけど私はまだ子供で、気の利いた言葉も言えず、大人を装うことも出来ず、ただ成長しきれない自分に苛立ちを覚えながらも、千笑と話し合うことも、田村に告白することも出来ていない。

自分から行動しなければ何も変わらないとわかっていても、私はその場に縛られているかのように、行動に移せていないのだ。

焦りと絶望を繰り返した、この半年間。それでも私は、大人になれない――。

* * * * *
* * * * *

それから半年後。クラス発表の掲示板の前に、美波は我が目を疑った。離れるかもしれないと思っていた、田村と千笑二人ともが、美波と同じクラスと書かれている。

気まずさだけが残っている中、半年経っても消えることのなかった田村への想いに、これからは嫌でも二人が恋人同士だという姿を見なければならぬ。また、亀裂の入った親友と、同じクラスでどう接すればいいというのだろう。

「美波！」

その時、呆然と掲示板の前に立ち尽くしていた美波は、突然肩を叩かれた。

ハッとして振り返ると、そこには半年間しゃべっていなかった、千笑の姿がある。あまりに突然のことで、美波は声が出ない。

「同じクラスだね。またよろしくね」

未だに目をパチパチさせて驚いている美波に目もくれず、千笑は

そう話しかけた。その様子は、まるでこの半年がなかったことのようにうだ。

「あ、うん……」

「教室まで一緒に行こ」

生返事の美波を、千笑が強引に引っ張る形で、二人は教室へと向かっていった。

「あ、智樹」

教室に入るなり、千笑は目の前に立っていた田村に声をかけた。

「おう、おはよう。鈴木とはまた同じクラスだな。腐れ縁ってやつ」
半年前と変わらぬ笑顔でそう言う田村にもまた、美波は戸惑いを覚える。いったい何があったというのか。ここ半年、喧嘩するように目も合わさなかった二人に、自分だけが取り残されたように、まるで態度が違う。今の美波には、二人に精一杯微笑みかけることくらいしか出来なかった。

休み時間になっても、千笑は変わらなかった。ただ、美波と同じ部活の友達も同じクラスだったため、休み時間も放課後も、美波は終始その友達と話していた。千笑と話すには、まだ心の準備が出来ていない。

そんな日が数日続いた。千笑も田村も、普通に挨拶をする程度で、取り立てて何かを話すようなこともなかったが、この半年間の態度とは明らかに違う。無視すること、気まずい雰囲気もない。ただ美波だけが、それを受け入れられずにいた。

そんなある日、部活に行こうとする美波に、千笑が声をかける。

「美波……」

「……うん？」

「……話があるの」

千笑の言葉に、緊張が走った。何か重大なことを聞かされるようで、怖い感じがした。

「……ごめん。部活あるから……」

「終わってからでいいんだ。待っててもいいかな……？」

そう言っている千笑も、美波の顔を窺うように、不安げな表情を浮かべている。

「……うん。わかった」

そんな千笑の表情に、美波は無下に断ることも出来なかった。ただ、その美波の返事に対して、千笑は本当にホッとしたような顔を見せたので、これで和解出来るのかもしれないと思った。

その日、部活を終えた美波のもとに、千笑がやってきた。もうすでに遅い時間だったが、千笑はずっと待っていたようである。

「お疲れさま」

千笑がそう声をかける。

「ううん。ごめんね、遅くまで待ってもらっちゃって……」

美波は、やっとともに千笑の顔を見て話すことが出来た。

「こっちこそ……どっか寄らない？」

「うん」

まだぎこちない感じがしつつも、二人はお互いの溝を埋めるように、静かに歩み寄ろうとしていた。

二人はそのまま、前によく行っていたファーストフード店へと足を運ぶ。

「ごめんね、突然……」

「あ、ううん……」

千笑が話し始めたので、美波は緊張しつつも、千笑の言葉に耳を傾けた。間が持たなくて、何度もジュースのストローを抜き差ししたりする。

「美波……ごめんね」

突然、千笑がそう言った。

美波は見つめていたジュースのカップから目を離し、千笑を見た。千笑は真剣な顔をして、美波を見つめている。

「千笑……」

「意地張ってばかりいて……無視したりして、ごめんね……」

「……千笑。それは私も……」

千笑は美波の言葉を遮って、首を振った。

「……あの日、美波の陸上大会の日、私は美波に言われたことが図星で、カッとして自分のことを棚に上げて……」

「……え？」

「私ね、もうずっと、智樹じゃない人のことが好きだったの……」

思わぬ千笑の告白に、美波は目を丸くした。浮気でも友達でもなかったのか。一体どういうことなのか。逸る気持ちを抑え、美波は千笑を見つめる。

「美波が見たっていう人は、私が好きになりかけてた人……彼氏じゃなかったけど、部活三昧の智樹に満足出来なくて、私は浮ついてた……美波に言おうとも思ったけど、違う人を好きになったなんて知ったら、美波に軽蔑されるんじゃないかと思って……」

「千笑……」

「だから、美波にその人のことを指摘されただけで、どうしていいかわからなくなっちゃって……無視し始めたら、もう元に戻れなかった……」

そう話す千笑に、美波は少し俯いて、首を振った。

「私も……千笑と同じ気持ちだったんだと思う。田村のこと……図星だった。でも言えなかった……ごめんね……」

お互いが謝り合って、二人は確実に歩み寄ろうとしていた。

「美波……いつから智樹のこと、好きだったの……？」

突然、千笑が疑問を投げかけてきた。美波は少し躊躇った後、正直に口を開く。

「一年の、夏頃から……」

「そんなに？ そっか。ごめん……」

「謝らないでよ。私、千笑と田村に別れて欲しいなんて思っていない。だから黙っていたように思ったの。出来ることなら、忘れようって……」

「でも、まだ好きなんだね……？」

静かにそう言った千笑に、美波はハツとして俯く。やがて静かに頷いた。

「ごめん……」

頷きながら、美波が言う。そんな美波の手を、千笑が取った。

「なに言ってるの？ 誰かを好きな気持ちなんて、誰にも止められるものじゃないよ。だけど、やっぱり少しショックだった……本当は話してほしかったよ。だけど、私も一緒……美波にも智樹にも意地になって、美波に智樹は取られたくない。智樹に美波を取られたくないって、そんな気持ちの繰り返しで、結局二人を傷付けて……」

「違うよ、千笑……」

「美波。私、智樹とは別れたんだよ」

「えっ？」

一瞬、空気が止まった。

「別れたんだ。今年の冬に……」

「……どうして……」

「私はずるいの……他の人が好きだったのに、智樹と別れたくなかった……いろいろ理由をつけては、誰かのせいにして自分を庇った。美波と智樹の仲が良いことが許せなくて、自分も他に好きな人がいるのに、二人の仲を裂こうとしてた……」

「千笑……」

千笑の本音に、美波はただ泣きそうな千笑を見つめていることしか出来なかった。

そんな美波に、千笑は言葉を続ける。

「私は、美波の友達でいる資格がない……だけど、同じクラスになって話すきっかけが出来たと思ったら、途端に声かけてた。出来ることなら、今まで美波にしてきたこと、なかったようになればいいって……だけど、そんなことが出来るわけないもんね……でも、これが最後でも、謝りたかったの。彼氏よりなにより、ずっと一緒にいた美波と離れて、私は取り返しのないことをしちゃったんだ

って……」

そう言った千笑の目から、涙が零れ落ちた。そんな千笑を見て、美波の目にも涙が浮かぶ。

「ごめん、千笑……私も千笑のこと、何もわかってなかったんだ。いくら部活が忙しくても、ちゃんと話し合うことは出来たのに、千笑がそんなに悩んでるなんて知らなかった……いつもだったら、好きな人が出来たら、ちゃんと話してくれてたのに……私、嬉しかったよ。千笑が話しかけてくれて」

美波もそう言いながら、千笑の手を握った。互いの温もりが通じる。今までの苦楽が、一瞬にして思い出される気がした。もう、言葉はいらなかった。

7、修復

次の日から、二人は本当にこの半年がなかったかのように、親友同士としての付き合いを手に入れていた。上辺だけでなく、心から信頼しあえる友達は互いしかない、二人はこの半年で痛いほど感じていたのだ。

「美波。今日も部活だね？ 今度いつ暇？」

休み時間、千笑が美波に話しかける。

「今度の土曜は空いてるよ。夏にはまた大会があるけど、それが終わったら三年は引退だし」

「そっか。ねえ、今度ショッピング行かない？」

「いいね。映画も見たいな」

「じゃあそうしょ。あと、カラオケも」

「フルコースだね」

二人は大声で笑った。そんな二人の目に、教室へ入って来た田村が映る。

「智樹も最後の甲子園か……春の大会も、いいところまでいったけど、駄目だったからな……」

ぼそっと、千笑が言う。田村とは別れたというが、二人は以前と変わらず、よく話す仲だ。進級と同時に、田村の態度も前と変わらぬものとなったが、やはり三人互いに、以前と同じようで違う気がした。

土曜日。美波と千笑は、久々に二人で出かけた。ショッピングをしたり、映画を見たり、カラオケに行ったり、半年の溝が完全に埋まったかのように、その日はいつもよりも充実しているように感じる。「ねえ、美波……智樹に告白はしたの？」

カラオケの途中で、突然千笑がそう言った。雰囲気酔ったかのように、ハイ状態の時だった。

「え？ ううん。まさか……」

「どうして？ もう私に遠慮することないじゃん」

「そういうことじゃないけど……そんな勇気ないよ」

苦笑して、美波が答える。

田村に恋人がいなくなっても、恋愛経験のない美波にとって、とてもすぐに告白出来るものでもない。

「それより、千笑は？ 好きな人とはどうなったのよ。どんな人？」

美波も負けじと、千笑に尋ねた。

「普通の大学生だよ。ナンパがきっかけだけど、面白い人でね。でも、その人に好きな人が出来て、ふられちゃった……」

「……そうなんだ……」

「美波。智樹は、美波のことを嫌いじゃないと思うよ。私も仲の良い二人に嫉妬したこともあったし……智樹は部活ばかりだったから、私もちゃんと付き合ってるっぽいことしてなかったけど……応援するよ」

「……ありがとう……」

美波はそう言うものの、とても告白する勇氣はなかった。千笑のように、恋に突っ走るタイプでもなければ、ダメージに強いタイプでもない。千笑の応援を言葉だけ受け取るように、美波は頷いた。

「もう時間だね。帰ろうか」

「うん」

二人はそのまま、カラオケボックスを出ていった。

「ああ、今日は楽しかったね」

「うん。映画もカラオケも、久しぶりだったし」

二人はそう言いながら、家路へと歩き始める。

しばらくして、お互いの家が近付いて来た時、前の方を歩く、見覚えのある後姿が見えた。田村である。

二人は目を見合わせると、千笑が大きく息を吸った。

「智樹！」

千笑の声に、すぐに前を歩く人物が振り返る。間違いなく田村で

あった。田村は二人を見て、静かに微笑む。

「デート？」

近付いてきた二人に、笑いながら田村が言う。

「うん、そう」

「よかったな。なんか二人が一緒にいるの、やっぱいいな。親友な
んだもん」

しみじみと田村が言ったので、美波と千笑は照れるようにして笑
い、歩き出した。

「智樹は部活？」

千笑がそう尋ねる。

「うん。今日は試合があったんだ」

「お疲れさま」

「まあ、それは鈴木も一緒だろ。今日は部活、休みなんだ？」

田村がごく自然に美波に尋ねたので、美波は素直に嬉しかった。
田村とは特に突き詰めた話はしていないが、半年間も口を利いてい
なかった二人とこうして話せることが、思う以上に嬉しく感じる。

「うん。今の時期は、結構休み……」

「へえ」

そうこうしているうちに、千笑の家に着いた。

「智樹。もう遅いし、美波のこと、送ってあげてね」

「え？ うん……」

「じゃあ、また」

千笑は美波に、応援しているという仕草を見せると、家へと入っ
ていった。

美波はそれを見て赤くなりながら、田村と無言のまま歩き始める。
「なんか、久しぶりだよな。二人で帰るのも」

やがて、田村がそう口を開いた。

「う、うん……」

そう答える美波は、緊張して胸の鼓動が高鳴って仕方がない。

「……でも、千笑と仲直りしたみたいでよかった。まあ、俺も要因

の一つだろうけど……」

「ううん。そんなことないよ……」

「ごめんな……」

そう言って振り向いた田村の顔は、夕日に照らされて美しく感じる。

「ううん……」

その後、二人は無言のまま、家路を歩いていった。

途中、田村の家は脇道に逸れるが、千笑の願い通り、田村は美波の家の前へと送り届けてくれた。

「ごめんね。疲れてるのに送ってもらっちゃって……」

「いいよ。じゃあ、またな」

「うん。ありがとう……」

すぐに背を向けた田村の背中に、美波の胸は高鳴るばかりであった。

その日を境に、美波と田村の関係も修復されていた。冗談も言い合えば、文房具の貸し借りをする、他愛もない学校生活が、時を戻していた。

それから数ヵ月後。受験や就職を控えた三年生は、夏までで部活を引退となる。特に田村の所属する野球部は、いつも地区大会まで進むものの、甲子園への切符をあと一步のところまで逃している。そのため、田村を含めた三年生は、例年にも増して力を入れているようだった。

それは各部活に属する一人一人が同じで、美波もまた高校最後の陸上大会に向けて、練習に明け暮れていた。

「先輩、さようなら」

家が同じ方向の後輩を見送って、美波は家路を歩いていった。夏に近付き、だいぶ日が長くなってきたものの、部活を終えたこの時

間ともなれば、住宅街は静かで薄暗い。そんな中に一軒、コンビニエンスストアが光って見える。用がなくても、なんとなく寄ってしまいう日が多い。

美波は今日も、コンビニエンスストアの中へと入っていった。すると、買ったばかりのアイスをかじりながら、田村が歩いて来た。

「今、帰りなんだ？ 陸上部も頑張るなあ」

田村が言う。

「う、うん。相変わらず、アイスばかり食べて」

美波は偶然の出会いに、笑ってそう言った。

「ああ。ちよつと食う？」

「ううん。いいよ……」

照れながら美波が拒否すると、田村は頷いて外へと出て行った。少し寂しさを感じつつ、美波は雑誌コーナーで新刊の雑誌を手にとると、レジへと急いだ。今出れば、田村に追いつくかもしれない。そう思っただけで店を出ると、田村は店の前に座って、アイスを食べ終わるところだった。

「あ、あれ。まだいたの？」

一瞬、言葉を失って、美波が言う。

田村は食べ終わったアイスの棒をゴミ箱に捨てると、美波を見つめて頷いた。

「なんか、ここでアイス食べるの、日課なんだよなあ」

田村はそう言って歩き出したので、美波も無言のまま、寄り添うように歩き出す。

「あ……もうすぐ地区の決勝だって？ 学校も大盛り上がりだよね」

沈黙に耐え切れず、美波がそう言った。

「まあねえ……今までも、あと一歩ってところで甲子園逃してたから、今年は頑張りたいってみんな思ってるし」

「うん。頑張ってるね」

田村にエールを送るように、美波は笑顔で頷く。

「……鈴木も、大会あるんだろ？」

「うん、もうすぐ。去年は失態見せちゃったから、今年は本当に頑張らないと……」

「失態じゃないよ。転んだだけじゃん」

「駄目だよ。陸上選手で転んだら」

「まあ、野球も一緒だけどね……」

田村はそう言うのと、横目で美波を見つめた。

「また応援しに行くからさ、時間あったら、こっちの決勝戦も見に来てくれよな」

微笑みながら、田村がそう言ったので、美波は何度も頷く。

「うん。あ、いつ？」

「今度の日曜」

「あ……」

野球の地区大会決勝戦の日取りを聞いて、途端に美波が俯いた。

「都合悪い？」

田村が尋ねる。

「うん……っていうか、私もその日、大会なんだ。今年はお互い見れないね……」

「そっか。そっちも一日がかりだもんな。俺は午後一番くらいだと思うけど……」

「うん……まあ、仕方がないよね」

「だな」

二人は苦笑すると、夕日が落ちていく街を歩き続けた。

偶然の出会いにもかかわらず、今日も田村は美波を家まで送り届けてくれた。小さな優しさが、美波にとってはとてもなく嬉しい。

「ありがとう」

「いや……」

その日の田村はいつもと違い、何かを考えているようだった。いつもなら、礼を言い終わる前に背を向けている時もある。

「……田村？　どうかしたの？」

「あ、ぼうつとしてた。じゃあな……」

田村はそう言って苦笑すると、そのまま去っていった。

8、ヒーロー

数日後。昼食の時間、美波と千笑は向かい合って食事をしていた。

「いよいよだね、大会」

「うん。今回は転ばないようにしないと」

「うん。私も今回は、真正面に座らないで、地味に応援するわ……」
冗談交じりに、千笑がそう言った。

美波が田村を好きだということを、千笑は以前より、学校で二人が楽しそうにしゃべっている時に薄々感づいていたが、昨年の大会前に、田村から美波を泣かせてしまったと相談を受けたこと、そして大会で美波が見せた態度で、それを確信したのだと、後で美波は聞かされていた。千笑と田村が一緒にいるところを見た直後に、美波の様子がおかしくなり競技中に転んだのだということを、千笑は見逃さなかったのだ。

「あはは。今回は大丈夫だよ……」

そんな話は、今では笑い話になっているものの、昨年の大会では記録も残せずにいたので、美波にとってあまり触れられたくないところだ。

「智樹の試合も、同じ日だってね……」

「うん……千笑は、野球部のほうに行っているんだよ？」

「なに言ってるの。もうこちらは関係ないって。それに、野球部は派手な応援団を引き連れて行くんだから。私は美波を応援しに行く」
「ありがとう」

二人はそう言って、お弁当をつつく。

「でも、今度の大会が終わったら、いよいよ引退か……その後は受験？ 美波はどこ受けるんだっけ？」

千笑が尋ねる。

「いろいろ考えてはいるんだけど、体育系の大学に行けたらと思うてる……千笑は？」

「私はまだ……でも、外語関係の短大がいいかな……ついにお互い、別々の道に行くんだね……」

千笑の言葉に、二人はしみじみとしてしまった。

「うん……でも学校は違っても、家は近いままだもんね。週末の買い物とかは、一緒に出来るよね？」

「もちろん」

二人はそう言うのと、笑顔に戻った。

そして、日曜日。去年の大会と違って、今日は雲一つない青空であつた。

「気持ちいいけど、暑い」

美波と一緒に競技場へ向かう、千笑が言った。もう真夏の格好だが、競技場にいる限り、汗が引くことはないだろう。

「どう？ 体調は」

千笑が尋ねる。美波は笑顔で頷いた。

「バッチリよ」

「そう。よかった」

笑顔で答える千笑に、美波は突然、真顔になり、前を見つめて口を開く。

「千笑。私、頑張るね」

「え？」

「今日はベストを目指す。それで、今日が終わったら……私、田村に告白しようと思う……」

突然の美波の言葉に驚きつつも、千笑は嬉しくなった。今まで、ことに恋愛に関しては、自分から動くようとしなかった美波の、一歩前へ出た言葉である。

「うん……うん！ 頑張って！」

そう言う千笑の顔に、美波は励まされたように頷いた。

先日、将来の進路について千笑と話した後、美波はいろいろと考えていた。高校を卒業すれば、千笑と学校が離れることはもちろん、

当然、田村とも違う学校になる。そう考えたら、美波は田村に気持ちを伝えずにはいられないと思ったのだ。

陸上競技場では、広い場内で各種目が行われる。美波も数種目出る予定で、客席で千笑が見守る中、準備運動を怠らず、田村への想いの決意を固めていた。

「先輩。これで最後の種目ですね」

数種目終えたところで、後輩の一人が美波にそう声をかけた。

「うん。行ってくるね」

美波はそう言うと、最後の種目である決勝戦のスタートラインに着いた。短距離選手である美波だが、ゴールは随分遠くに見える。

「ヨイ」

考える暇を与えず、号令がかかった。美波は反射的に前を見据える。そしてピストルの音が鳴り響き、美波は一心不乱に走り出した。去年は、つまらないことで悩んで転んだのだと、嫌な思い出も蘇る。しかし今は、ゴールに思い浮かべた田村の姿だけが見えた。

途端、美波は一番でゴールを切っていた。すぐに振り返ると、自己ベスト記録を破っている。

「先輩！」

嬉しさと同時に、後輩たちが駆け寄ってきた。

「おめでとうございます！」

「ありがとう。なんだか実感が沸かないな……」

そう言っている間にも、美波は優勝の実感を噛み締めていた。

「優勝したんだ、私……」

静かに、美波がそう言った。

大会が終わると、すぐに千笑が駆け寄ってきた。そして、美波に抱きつく。その目には、涙さえ浮かべている。

「美波、おめでとう！ 本当、すごかった。もう私、嬉しくて嬉しくて……」

「やだ、千笑。なんで千笑が泣くのよ」

そんな美波の言葉に、側にいた部員たちも笑っている。千笑はすぐに我に返ったように、美波の手を引っ張った。

「千笑？」

「さあ、じゃあ行こう」

「え、どこに？」

「決まってるでしょ。野球場よ。ここからそう遠くないし。じゃあ部員の皆さん。我々は用事がありますんで、先に失礼しますね」

千笑は部員たちにそう言うと、強引に美波の手を引っ張り、歩き出した。

「ちよっと、千笑。勝手に部員の輪から外れたりしたら……」

「なに言ってるの。十分結果は残したでしょ。それに、大事なものはこっちも同じでしょうが」

「でも、もうとっくに試合、終わっちゃってるよ……」

突然の千笑の行動に、美波は弱気にそう言う。田村の試合は午後一番だと聞いていたが、もう夕方に近い。

「現在、延長十二回。さっき打たれて、今は八対七でうちが負ける……でも、智樹は最後まで諦めないはずだから、美波も応援しなきゃ駄目だよ」

そう言った千笑の顔は、真剣そのものだった。

「千笑……」

二人は急いで、試合中の野球場へと向かっていった。

野球場では、長引きながらも白熱する試合に、客は誰も帰ろうとはしていなかった。美波と千笑は、走り込むようにスタンド席へと足を運んだ。

（田村……田村……田村！）

逸る気持ちを抑え、美波は心の中で、何度も何度も田村の名を呼んでいた。

その時、カキーン——と、気持ちの良いくらいの音が聞こえ、白

いボールは大きく弧をかい、ファールかホームランかの、際どいところへと飛んでいく。

「田村！」

美波が叫んだ。今ボールを飛ばしたバッターは、田村だったのだ。ボールはそのまま、観客席へと放り込まれた。ホームランである。たちまち、観客が歓声とともに立ち上がった。今来ただけの美波と千笑も、ホームベースに帰ってきたのが一人だけではないのが見え、今の田村のホームランで、サヨナラ勝ちをしたことだけわかる。

「美波！ 美波、やったよ！ サヨナラホームランだって！」

「うん……うん……！」

美波の目からは、涙が零れ落ちていた。

二年前、同じ場所で同じ光景を見ていた。その時の感動がそのままここにるように、美波は感動に身を震わせていた。

田村の率いる野球部は、やっと甲子園への切符を手に入れたことになる。

「すごい。本当に……」

涙を拭いて、美波は静かにそう呟いた。

8、ヒーロー（後書き）

次回、最終回です。

9、好きな人

静けさが戻った野球場では、美波と千笑が動けずにいた。いざ告白をしようと思っても、シチュエーションから何から、何も浮かばない。

「帰ったほうがいいなら、先に帰るよ」

気を利かせて、千笑がそう言う。しかし、美波は首を振るばかりだ。

「ううん……」

「でも、ここにいても智樹には会えないよ。もしかしたら、すれ違っっちゃうかも……」

「うん、ごめん。なんか、何も浮かばない……」

「じゃあ、電話とかで呼び出す？」

「うーん……」

「……とにかく、ここ出ようか」

「うん……」

緊張のし過ぎで何も考えられなくなった美波に、千笑は仕方なく野球場から連れ出した。

千笑にとっては、かつて付き合っていた彼氏に告白しようという美波だが、応援したいという気持ちしかない。それは美波が親友だからということはもちろん、時間が解決した自分の心のけじめがきちんと出来たからだろう。

「……ごめん。今日は無理かも……」

外で待っている間、緊張で落ち着かない美波が、ついにギブアップ宣言をした。

「なに言ってるの。告白なんて、勢いがなくちゃ駄目だよ。それに、帰ったらまた後悔するよ？」

「うん、でも……」

「お疲れ」

その時、幸か不幸か、一足先に田村だけが出てきてしまった。他の部員の姿はまだない。

「田村……」

「来てくれたんだな。千笑からメールもらってさ」

田村のその言葉に、美波は千笑を見つめた。

試合が終わってから、美波が悩んでいる隙に、千笑は田村と会えるよう取り計らっていたのだ。

そんなこととは知らず、美波は突然現れた意中の人物に、何を話しかければいいのか、まったく考えられなくなってしまった。

「あ、私、寄りたいところあったんだ。ごめんね、先帰るわ」

その時、千笑は白々しくそう言うと、不安げな美波の背中を軽く押して、そのまま去っていった。

「そっちはどうだった？」

不可解な千笑の行動に目もくれず、田村が美波にそう尋ねる。

「あ、うん……一応、一種目優勝した……」

美波は目先の質問に正直に答えるものの、これからしなければならぬという、一度も経験したことのない告白というものに、思いを馳せる。

「マジ？ おめでとう！」

「う、うん、ありがとう。田村も……ついに甲子園だね。おめでとう」

「ありがとう」

田村はそう言うと、一つのボールを差し出した。

「……え？」

「さっきのホームランボール、返してもらったんだ。特に意味はないけどさ……よければもらってよ」

「どうして？ でも……」

「なんかさ。打つ瞬間、頭の中に鈴木の声が聞こえてさ……」
少し照れながら、田村が言った。

「え……？」

「まあ勝手だけど、そのおかげでホームラン打てたんだと思うんだ。だから、鈴木にとっては意味不明だろうけど、よかったら受け取ってよ。俺が勝手に感謝してるだけだけど」

美波は震える手を差し出した。するとその手に、田村の手からホームランボールが渡される。感無量で、美波の瞳から涙が溢れ出した。

「な、なに？ どうした？」

「ううん。ただ、すごい試合だった……田村、すごかった。大事なボールなのに、いいの？ 私なんかがもらっても……」

そう言った美波を、田村は静かに抱きしめた。

美波は、何が起こったのかわからない。ただ、田村の温もりだけは感じる。

「……好きだ」

やがて、田村がそう言った。美波は田村の顔を見上げる。

「……う、そ……」

信じられない思いで言った美波に、田村は抱きしめる手を離す。

田村の顔は、いつもの可愛い笑顔でも、普段話す時の顔でもない。試合中のように、真剣そのものだった。

「田村……」

美波は、それ以上の言葉が出なかった。嬉しさの反面、信じられない気持ちでいっぱいだ。だが、それはすぐに嬉しさに変わる。

「ずっと、気になってたと思う……千笑がいたからって話さない時期もあったけど、それはすぐに後悔した。鈴木と目も合わさなくなっって、話もしなくて、どんどん鈴木が存在が大きくなって……だから今日、絶対甲子園の切符を取って、ちゃんと鈴木に謝ろうって……鈴木に告白しようって決めてたんだ……」

真剣にそう言う田村に、美波は思わず抱きついた。

「私も。ずっと……ずっと好きだったの……」

体の底から搾り出すように、やっと美波はそれだけを口にするこ
とが出来た。

二人は笑い合うつと、手を握る。

「一緒に帰ろう」

「うん……」

言葉少なめに、二人は家路を歩き始めた。

その夜、美波は千笑に、報告の電話を入れた。

「うまくいった？」

「うん……ありがとう」

少し照れながら、また少し複雑な気持ちで、美波は礼を言う。

「やっぱりね。智樹も美波のこと、好きだと思った」

「またまた……」

「どうしたの？ 嬉しくないの？」

「ううん……ただ、千笑だって関係ないわけじゃないから……」

親友のかつての恋人と付き合うということに、美波は少なからずの抵抗を感じていた。

だが、そんな美波と違い、千笑はすぐに笑い飛ばす。

「なにそれ。私と智樹は、もう関係ないんだって。それにね、私、美波があんなに頑張ってる姿見て、感動したんだよ。私も負けていけないって」

「千笑……」

「私も頑張るから、今度は私のこと、応援してよね」

千笑の言葉に、美波は笑って頷く。

「もちろんだよ。親友じゃない」

「うん。これからも、秘密はなしにしようね。二人だったら、どんな危機も乗り越えられるって思うんだ」

「うん。私も」

二人から、笑顔が零れた。

「これからも応援してるから、頑張って」

やがて千笑がそう言った。美波もすぐに返事をする。

「私だって千笑のこと、応援してるよ」

「うん。私、これから電話してみる。一度ふられたけど、連絡取ってないわけじゃないし、まだ好きだから……もう一度、頑張ってみる」

「うん！」

美波は、そう言った千笑が誇らしいと思った。

二人はこれからも、競い合い、支え合って生きていくのだと、二人は心に誓っていた。

それから数カ月後。

「美波。シャーペン貸して」

隣の席の美波にそう言ったのは、恋人となった田村である。

「また忘れたの？」

「あはは……教科書だったら、いつでも貸すけど？」

パンパンになった机の中を指差して、田村が言う。

「いいよ。はい、シャーペン」

「ありがとうございます」

「聞いて聞いて、お二人さん！」

そんな二人の間に割って入ってきたのは、千笑であった。

「どうしたの？」

「うふふふ……ジャーン！」

意味ありげに千笑が差し出したのは、携帯電話であった。液晶画面には、開封されたメールが見える。

「好きだ。よかったら付き合おう……って、マジ！」

メールを読み上げて、美波が千笑を見つめる。

「マジ、マジ。最近いい雰囲気だったけど、やっとこんな感じになりました。まあ、前の彼女とはとっくの昔に別れてみたい。でさ、今度ダブルデートしようよ！」

「いいね、いいね」

興奮した様子の千笑に乘せられ、美波と田村も頷く。

こうして数日後には、美波と田村、千笑とその彼氏のダブルデー

トが決行された。美波の片手には田村の手が、もう一方の手には千笑の手が握られ、千笑もまた恋人となった意中の彼氏の手が握られていた。

* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *
* * *

こうして、私たちの高校生活は、幸せいっぱいの中に幕を閉じた。

私と千笑と田村、大学はバラバラになってしまふけれど、千笑はこれからも、私にとってかけがえのない親友で在り続けるし、田村はいつまでも、私のヒーローだ。

そして私は、もう迷わない。二人がいる限り、一人じゃないから。あきらめなければ、いつか叶うことがあるのだと、信じて――。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9212m/>

彼女のトモダチ

2010年10月8日13時55分発行